

先人の足跡を今に活かす

村研発足 60 周年を記念して、2013 年 6 月 15 日（土）13～18 時、明治大学駿河台校舎にて「先人の足跡を今に活かす」と称する座談会を開催した。報告を依頼した会員には、以下の 3 点、すなわち「先人の足跡として、家、家連合、同族団、親族結合、村落、自然村、近隣組織、年序組織、共同体などを念頭に置くこと」、「海外調査においてどのような事項を分析の対象とし、それを先人のどのような足跡と関連づけてとらえようとしたのか」、さらに「先人の足跡と関連づけて分析していない場合、なぜ使わないのか、使えないのか」に留意して各自の研究のフィールド、テーマについて報告するという課題があらかじめ与えられた。座談会には村研会員、非会員を含め、32 名が参加し、5 時間に及ぶ熱心な議論をおこなった。以下は基本的には当日の録音記録に基づくが、紙幅の都合により一部、割愛したことをお断りする。また、当日の配布資料を掲載できなかったこともご了承ください。

なお、編集は松岡昌則、堤マサエ、佐藤康行、市田知子がおこなった。（村研ジャーナル編集委員会）

発言者順序（敬称略）

開会挨拶 松岡昌則

趣旨説明・司会 佐藤康行

柿崎京一（韓国）、田原史起（中国）、黒柳晴夫（ジャワ）、長谷部弘（バリ）、竹内隆夫（タイ）、岡江恭史（ベトナム）、吉野馨子（バングラデシュ）、國方敬司（イギリス）、市田知子（EU、ドイツ）、大友由紀子（南部ドイツ語圏）、河村能夫（アメリカ）、池上甲一（アフリカ）

全体コメント 大鎌邦雄 高橋明善

閉会挨拶 堤マサエ

佐藤 「先人の足跡を今に活かす」というテーマで村研の 60 周年記念事業の座談会をおこないます。まず松岡会長にご挨拶をお願いします。

松岡 今日は 60 周年記念事業にご参集いただきまして、大変ありがとうございます。報告される先生方にはご快諾いただき感謝申し上げます。

村研ができてから 60 年、人間でいえば還暦だから、研究委員会にお諮りしてこのような企画になりました。詳しくは佐藤研究委員長からご説明いただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。実のある議論を期待します。

佐藤 本日の趣旨説明をおこないます。50 周年で草創期の村研について座談会がありました。今回 60 周年、還暦ということで、少し違う形の座談会を企画しました。一つには、1990 年代以降、会員の方々がアジアを中心に海外調査に出ておられ、その成果も出てきています。そのような方々が村研の先人の成果をどのように汲み取り、活かしているのか、継承できないとすればなぜなのか等のお話をしていただき、次の若い人たちにバトンタッチをしていただきたいと思います。そして海外研究と国内研究の橋渡しをしていただければ、と思います。

もう一つは、海外研究の成果から、これまでの日本研究に対してどのような批判ができるのかを考えたいと思います。

まず各先生方に 10 分以内でお話をしていただき、続いて 5 分ずつ質疑応答の時間を設けます。先人の足跡を自分自身はどのように考えているのかという点に最初に触れていただき、その後、自由に議論を展開していただきたいと思います。フロアからの活発な議論を期待しておりますので、よろしくお願いたします。それでは、柿崎先生からお願いします。

韓国の農村調査研究から

柿崎 私は長い間、日本の村や家の研究をやってきたのですが、日本の特色をもう一遍、相対的に見つめ直したいという思いから韓国、中国を調査研究することにしました。本来、韓国研究や中国研究をやっている人間ではないということをご了解していただきたいと思います。

一つには、外国研究の場合、調査研究方法がとくに大事ではないかということです。もう一つは、外国で調査をやった具体的な何を得たか、それが先人

の研究とどうつながるのかをお話したいと思いません。私は先人のやっていることを無視してはけません。

私が最初に中国の調査をおこなったのは1990年でした。その1年後の1991年には韓国にも入りました。報告書を刊行したのは2008年ですから、その間の十数年にわたって両国の農村に同時並行的に入っていました。基本的なねらいは、それぞれの民族のもつ性格について学ぶことであり、そのためにはとにかく基礎的なことをやろうと思いました。中国や韓国で常識と思われることを、あらためて日本について再考してみたいと思いました。

フィールドとしては、できるだけ都市化、工業化、産業化の進んでいない集落を探し求めました。原型になるべく近い村を見ようと思って、それを探するのに時間をかけ、韓国でも中国でも山村に入りました。

鈴木栄太郎先生は、自然村という概念を日本で研究されていて、それを韓国でどういうふうに理解できるかを考察されました。自然村や集団の概念は調査する上では大変役に立ちました。

家族という概念はたいへん難しいです。中国農村に行ってもない頃、ある家庭を訪ねて「ご家族は何人いらっしゃいますか」と聞いたところ、返事が来ない。通訳は私のゼミの中国人の留学生で、私の質問の意図がわかっていたようですが、中国語で議論をしている。「何を議論していたのか」と聞いたら、「相手が家族をわかっていないので、人数がどれだけと答えられない。だからいろいろ説明している」と言う。私は「しまった」と思いました。

「家族」は学術用語、操作概念です。日本でもかつては同じようなことがあったと思います。戦前、日本の農村の人々が、家族という言葉を使ったのはいつ頃がはじめかある村で調べたら、戦時中になってからということがわかりました。

我々が注意しなければならないのは、学問上の概念をそのままぶつけてしまうことの危険性です。日本の農村調査でも「集団」という言葉をうかつに使って、村の人に「そんな立派なものには入っていません」と言われたことがありました。

研究者は日本の概念でものを見てしまいがちです。韓国の農家には、土地、農地を持っていても日本のような家産という概念が基本的でない。日本では家産に基づいた家業経営が家の実態概念になりますが、その概念で中国や韓国の家を見ようといっても見えない。

韓国では両班ヤンバンという李氏朝鮮時代に起源をもつ貴

族階級の人々が作った村が支配的です。農民の多くはだいたいどこかの両班に属していますが、この構造は日本とはまたえらく違います。

私の中国・韓国調査の動機は、日本の村をもう少しよく見たいという思いでした。それは、有賀喜左衛門が民族的性格というものに強い関心をもっていたことと関連します。有賀先生は、韓国と中国と日本との文化的な比較に関するエピソードをよく話してくださいました。愛蔵の陶磁器を並べて、韓国のもの、中国のもの、日本のものの違いからいろいろな話をしてくださいました。有賀先生はそれぞれの民族の個性的性格、民族の心に関心を抱いておられました。先生がおっしゃるような違いに触れてみたいと思って60歳を過ぎてから私は出かけました。

最後に調査から得た知見を申し上げます。中国・韓国・日本については、漢字文化、仏教・儒教文化圏としての共通性を強調することがしばしば見られました。しかし実際には随分日本と違うことがわかりました。日本が「定住文化型社会」であるのに対して、韓国や中国は「移動文化型社会」と言えるのではないかと思います。韓国と中国とは仔細に見ると違いますが、日本と対比すると同じカテゴリーに入れてよいように思います。

たとえば韓国では、一軒丸ごと農地を売り払って離村する例が珍しくなく、反対に血縁関係のない人が一家で来住しても村人たちが特別に違和感を抱くことがない。つまり、移動に伴う緊張関係が、移動する本人と村民との間にさほど生じないし、大きな話題にもならない。日本の同族村と違う点は、離村しても父系血統の系譜上の絆は族譜によって確保されている。この点は、中国でも家譜によって保証されています。つまり、自己の系譜上の位置が村を越えても相互認知を可能にする装置といえますか、規範の文化が確立しています。

もう一つ例をあげますと、村を越えた関係のネットワークが系譜関係の外縁までも拡大するということです。韓国の社会構造の特徴の一つですが、「ウリ」(私たち)の構造です。この構造は自己の帰属する堂内(タンネ・通称チバンといい、近親の血縁集団)→門中→宗族から更に同郷同字→知人へと同心円状に社会関係が拡大する。しかし、いったん社会的危機に直面すると、外縁部から切り捨てて縮む。ウリが縮みきったときに堂内に収斂する。こうした構造は中国の伙(huo)とか伙伴(huoban)や帮(bang)にも基本的に共通しているように思います。

こうした事象は移動に適合的なシステム、文化として日本とは違う社会構造を特徴づけているように思います。以上が韓国・中国の農村調査から学んだことです。

佐藤 どうもありがとうございました。質問はございますか。

秋津 私も韓国農村社会の特徴を捉えようとして調査研究をおこなったことがあります。農業者に焦点を当てて、韓国農村社会の再生産がどういうふうにおこなわれるかを調べました。やはり農村住民の移動性の高さ、定住への執着のなさを日本農村との違いとして感じました。

1つ目の質問は、韓国の移動文化、移住文化という場合、どの時期を指すのかということです。植民地時代とその後の朝鮮戦争の時代がありました。2つの時代に人の移動が半ば強制的におこなわれ、ぐちゃぐちゃになっている部分があります。2つ目の質問は、両班を基準に考えるとき、両班ではない村というのがあります。正しくは1つの姓がマジョリティになっていない村、多数の姓が混在する村です。1つの姓が多数を占めている村の方が移動が少なく、マジョリティとなる姓がない村の方が、移動が激しい。韓国農村の場合は階層的な構造にも考慮して、移動と定住を考えるべきと感じました。ご意見をうかがいたいと思います。

柿崎 まず両班制度は李朝時代にできたものなので何百年か経っています。韓国には封建制がない。両班の宗家が村にとどまっていることはほとんどない。みんなソウルに出てしまっ、祭祀のときだけ本貫の村に帰ってくる。

とくに内戦、朝鮮動乱でものごと大きく変化しましたが、両班村では族譜はきちっと保存されている。どこに移動しても自分のアイデンティティが明確です。日本の場合は同族といっても、村から都会に出てしまうと胤の糸を切られたような状態で、関係性が非常に希薄になる。韓国の場合は、極端に言うとも日本に来ていても、自分の子供が2歳になると宗族の族譜に登録して、それが族譜に記載されるというように、アイデンティティが確保されています。

2番目の質問ですが、私は両班でない村を見ていません。ただ、文化人類学の方が言っていたと思いますが、韓国人の90%は両班に属するとのこと。非両班の村があることは聞いていますが、足を踏み入れたことはありません。もし行ける機会があれば気をつけたいと思います。

中国農村研究における出来事中心のアプローチ

佐藤 ありがとうございます。続きまして田原先生をお願いします。

田原 僕の場合、鈴木栄太郎、有賀喜左衛門、中村吉治、福武直などの日本の農村社会学の著作をここ5～10年に大学院のゼミで輪読して吸収してきました。もともと中国研究をおこない、後から方法論として農村社会学を学んでいます。

中国と日本というのは全く違う社会ですので、日本の農村社会学の概念や議論を直接、中国にもって行って適用するのは難しい。ですから、比較の方がよいと思います。

たとえば共同体という言葉ですが、中国を含め海外の農村を分析する際には、この言葉は安易に使わないほうがいいと思います。むしろ、共同性のあり方がどう違うのか、を問題にした方がいい。共同性を有していない村など存在しない。共同性が強い、弱い、閉じている、開かれているなどの比較はできるでしょう。そういう意味では、先人の足跡を活かすことができると思います。

中国の村の調査で感じていることを述べます。これは調査方法にも関わることです。日本の農村社会学では、家という団体が単位となっていて、それらが目に見える形で組織化されていることに注目してきました。行政村、氏子集団、檀徒集団、講中、近隣集団、労働組織、水利組織、山林の管理組織、生活組織などです。こういった方法的な前提をそのまま中国に持っていくと、非常に難しい。つまり目に見える組織や集団だけを見ていたのでは、共同生活の実態が捉えられない。

目に見える、恒常的な組織や集団がないにもかかわらず、インフォーマルな形でコミュニティの問題が解決されている。逆に、村民委員会というフォーマルな組織が存在するのに、看板で何もやっていない場合が往々にしてあります。それが中国の面白いところでもあります。

私が研究対象にしているのは、村の周辺のみクロな公共建設、公共サービスのあり方、そういう個々の農家が個別に対処できない公共的な生活がどういうふう立ち上がっているかです。どういうタイプのリソースを使っているか、政府なのか市場なのかコミュニティなのか、という観点から調べています。中国の村の公共生活を成り立たせている仕組みは、組織・集団中心のアプローチだとなかなか見えてこない。そこで、「出来事中心のアプローチ」をおこ

なっています。出来事というのは「事件」、つまり村が共同で対処しなければいけないような問題やイシューが発生した場合です。誰がどう動いて、どういう個人的な関係を使って、どういうまとまりを形成してそういう問題を解決しているのかという観察が必要になる。

たとえば、集落と外部をつなぐ道路が未舗装のことが多かったため、多くのコミュニティでは、雨が降ったら路面がぬかるみになって外に出られないという問題に直面していました。村民たちがまとまって問題を解決できる村と、なかなかまとまれない村とがあります。まとまることのできる村が問題解決に向かうプロセスを観察すると、そこでは組織というよりはリーダー個人の存在というのが大事になっています。みんなを引っ張っていくようなリーダーがいれば、「じゃあ、お金を出そうよ」、「人手も出そうよ」ということになり、道を整備してコンクリート舗装し、整備していきます。「道づくり委員会」、道普請の集団はないので、具体的に人々のまとまる範囲を見ていかなければなりません。

この共同性の立ち上がり方を概念化すると、「原子」「関係」「団結」の3つの局面が流動的に現れる。コミュニティの必要が生じてリーダーが現れると、リーダーが自分の「関係」を用いて外部資源を動員し、これに呼応してある範囲の人々を「団結」の局面に導くわけですが、問題がひとたび解決され、「団結」の必要性が失われると、人々の関係はまたばらばらな原子の状態に戻っていく。出来事を中心として3つの局面が循環するイメージで捉えることができます。

集団や組織を見ることでほぼ村の共同生活の全貌が描けるというのは、日本の農村社会の特徴なのではないかと考えます。中国を含め、海外には組織だけ見ていたのでは共同生活が見えないという地域も多いのではないかと思います。

佐藤 ありがとうございます。どなたか、質問はありませんか。関係性に注目して農村を捉えた方がよいというお話だったかと思えます。

田原 関係は外から見えないので何か事件を通じて描いていくしかないということです。

高橋 戦時の満鉄の中国慣行調査以来、中国に共同体があるかないかの論争がありました。中国革命で個人の財産がなくなり、資産家がいなくなりました。そのような歴史的变化を見てほしいと思います。中国では個人がばらばらだと言う人と、歴史を遡れば共同体が強いと言う人がいる。後者の議論

は歴史学者に多いと思います。ここでご回答を求めてはいませんが、少し歴史を遡って関係を見ていただきたいと思っています。

田原 そうですね。

河村 大変インパクトを受けました。中国からの留学生と接していて、おっしゃる点がよく理解できます。ただ、日本での同族関係に相当する血族関係の結びつきと、大学での同期生との結びつきが非常に強く、この2つの結びつきをフルに利用しているようです。それと今のリーダーのあり方とはどう関連するのでしょうか。

田原 関係は個人が私的に発展するための資源です。自分の家を豊かにするために関係を使う。自分が発展していくための資源です。その個別の関係を超越しているところがリーダーたるゆえんです。自分との関係でつながっていない人も含まれている、場としてのコミュニティがあり、そこで自分と自分の関係者だけの利益を図るのではなく、コミュニティ全体のことをやる人がリーダーになります。

中国社会は「関係主義社会」と呼ばれたりしますが、ある条件のもとでリーダーが立ち上がってくる余地をもっていると思います。それは、故郷に錦を飾りたいとか、自分がリーダーになっておけば自分の子供も孫の代までも名を残し、尊敬されるという伝統的な考え方です。そのために自分の私的な関係を使って公的なこと、公共的なことに使っていくようなリーダーを生みだし、「団結」の局面を導くメカニズムが中国社会には必ず存在しているので、「関係」と「団結」の両面を見なければならぬと思います。かなり動的に理解しないといけないと思っています。

ジャワ農村社会の調査研究から

佐藤 続きまして、黒柳先生をお願いします。

黒柳 インドネシアで、高橋明善先生ほか日本の農村社会学者が本格的にフィールドワークをスタートさせたのは、1970年代末から80年代前半ではないかと思えます。それ以前、農業、水利などのトピックス、あるいは親族や家族についての調査研究は、ジャワ、インドネシアについておこなわれていました。文化人類学、農業経済史、農学、いわゆるエリアスタディーズの先生たちは、農村社会学者が入る以前から入っていました。

農村社会学は比較的遅かったわけですが、古谷野正伍先生を代表にした海外学術調査で、高橋先生ほかがおこなったジャワ農村調査が最初だったと言え